２００２年 – ２００４年インタビュー記録

川野　徳幸　編
広島大学原爆放射線医科学研究所

2002 年 7 月 18 日　サルジャル村（サルジャル村診療所）

2002 年のインタビューアー：平岡・川野

本年がアンケート調査・被災証言収集調査の初年度であった。当初、被災者へのインタビューは想定していなかった。しかし、アンケート・証言収集の過程で、質問項目以外の貴重な証言を聞く機会に恵まれた。そのため、翌年からインタビュー調査を開始し、その記録を残している。従って、初年度は走り書き程度にしか、記録を取っていない。そこで、本年分に関しては、編者のメモ書きと共に、それを補足するため、アンケート調査票に書かれた証言を転載する。

サルジャル１、男性、1934 年生

1953 年 8 月大きな実験があった。サルジャルから 60 キロ離れたズナメンカ村 に強制移住させられた。500 台の軍隊の車が来た。移住先で 1 ヶ月過ごした後、村に帰ってきたら、脱毛した犬、猫を多く見た。1960 年代に父母が相次いで癌で死亡した。1964 年から 89 年の間に 103 人の自殺者が出た。当時警察官をしていたが、病気を苦にした自殺だった。

＜証言＞

1949 年 4 月末明るい日、2 機の飛行機が同時に飛来しデゲレン山の北西へ向かいました。その 2 機が分かれて、原子爆弾をデゲレン山の北西に投下し、飛び去って行きました。初めそれはとても巨大な光線で（太陽のような）、大きな音がし、それからひどい臭気がしました。私がサルジャル村にいた時（中学２年生）、ロシア人が突然ヘリコプターできて住民たちから聞き取りをしました。人々は、見たこと聞いたことを話し合いました。1953 年までこのようなことが繰り返されました。1953 年 8 月 12 日朝 8 時に水爆実験が行われました[1]。その爆発は非常に大きかった。その光線は太陽よりも強力だった。震度 3 から 4 に相当する揺れでした。

[1] 旧ソ連最初の熱核爆弾（通称「水爆」）実験。そのエネルギー量は、広島原子爆弾の約 25 倍。

とても大きな音がした。ほとんどの人たちは大変な臭気で頭痛がし、目が痛み、気分が悪くなり嘔吐しました。1949 年から 1989 年までの 40 年間に約 600 回の地上・大気圏・地下核実験が行われた。それらは全てサルジャル村から 25 キロ～30 キロの範囲内で起こった。ソ連崩壊後 3 回核実験が行われ、老人たちが犠牲になった。彼らは、食道癌・肺癌・その他の癌により死亡した。現在、サルジャル村では、1922 年生まれの男性が最年長です。103 人の人々が首をくくって自殺した。2000 人の人が癌でなくなった。ここでクラス全ての住人は病気である。カザフは旧ソ連の核実験場になった。次はロシアの版だ。日本は援助をしてくれているが、それは十分ではない。独立したカザフは、貧しくなった。それを改善するためには、資金が必要である。しかし、我々に資金力はない。わたしの友人×××は肺の手術をし、30000 テンゲ[2]払った。今年彼女は再度手術をして 15000 テンゲ払った。（川野徳幸他編（2006）『カザフスタン共和国セミパラチンスク地区の被曝証言集』、広島大学ひろしま平和コンソーシアム、p19）

2002 年 7 月 19 日　カイナル村（カイナル村診療所）

カイナル 1 、女性、1924 年生

カザフで実験してほしくなかった。しかし、当時は、重要な実験を旧ソ連邦の中で、ここカザフにて行うということに対し、誇りさえもっていた。1959 年に教師としてカイナル村に赴任したが、実験の度に生徒たちを避難させた。実験の前日になるとヘリコプターと共に軍隊がやってきた。

＜証言＞

ポリゴン[3]周辺に住んでいるカザフの人々は、ほとんどの核実験で避難処置が採られなかったため、多くの住民たちが被曝した。現在もその核実験の影響が続いている。希望は治療の援助をお願いします。それが私たちの望みです。（前掲、p32）

2003 年 8 月 11 日　サルジャル村（サルジャル村診療所）

2003 年のインタビューアー：平岡・松尾・川野

サルジャル 1、女性、1937 年生

ズナメンカ村で生まれた。1955 年の結婚後、サルジャル村に移住。それ以後、46 年

---

[2] テンゲはカザフの通貨。1 テンゲ ＝0.75 日本円（2008/12/29 時点）。

[3] カザフスタンでは核実験場のことをこう呼ぶ。さらに転じて核実験そのものを指すことも多い。

間家畜を飼って生計を立てている。2000 年に夫を肝臓癌で亡くした。現在は 1969 年生まれの子供と二人暮らしである。その子供は第一級の障害者で障害者年金をもらっている。他の 3 人の息子はセミパラチンスクに住んでいる。娘は結婚、教師の息子は死んだ。彼はポリゴンのせいで死んだ。年金はおよそ 10000 テンゲもらっている。核実験が健康に悪影響を与えていると思う。実験の時、軍人がやって来て、実験の際には窓を閉め、外に出て伏せるよう指示された。サルジャル村から 40 キロの放牧地で実験を見た。その時は、ポリゴンのほうには行っていない。その後も、ほぼ同じ場所で放牧していた。核実験場に入り、ケーブルなどを取ったこともある。これにより被曝したのか、と思うことがある。1963 年以降に、核実験の際に移住した経験がある。ズナメンカ村に約 1 ヶ月間移住させられたことがある。家畜も同時に移動させられた。ただ、移住しないこともあった。

サルジャル 2、男性、1938 年生

サルジャル村で生まれ、ここで育ち、現在に至っている。セミパラチンスクに行くと 1 日か 2 日寝込む。サルジャルの汚れた空気に慣れているから、セミパラチンスクのきれいな空気の中では気分が悪くなる。1953 年以降核実験の様子を見た。煙が出て一面赤く染まった。実験の時には、寄宿舎にいたが、朝 9 時に、戦争体験のある学校の先生から外に出て伏せるよう指示された。実験があることは軍人が知らせてくれた。爆発があると言った。実験後は軍人の許可を待ち、帰宅した。ある年の 9 月にキノコ雲をみた。1953 年、約 2 ヶ月間、ズナメンカ村に移住させられた。身の回りのものだけもって移動した。サルジャルに帰ってくる前にコケンタオ[4]にもしばらくいた。帰ってみると毛の抜けた動物を見た。実験・爆発のときには、何も考えなかった。怖がったりはしなかった。実験の光景などを夢に見たことはない。

サルジャル 3、男性、1930 年生

サルジャル村で生まれ、現在に至る。1949 年、19 歳の時に初めて爆発を見た。最初、核実験だとわからなかったが、爆発の時には兵隊がやって来て外に出て伏せるように言われた。兵隊の数はかなり多かった。爆発の時は、何もわからなかったが、怖かった。犬、猫の毛が抜けたのを見た。1953 年、軍隊の車でアヤグス、カエッシ、バカナス、ズナメンカなど色々な所に、家畜と共に移住させられた。

[4] 回答者によれば、ズナメンカ村から約 15 キロに位置する小村。

サルジャル 4、男性、1939 年生

サルジャル村で生まれ、ここで育ち、現在に至る。職業はポリゴンの中でドライバー（60 - 82 年）をした。ポリゴンの中で、板・レンガ・ケーブルなど機材を運搬していた。それら機材で家を造ったこともある。ソルホーズの副村長を含めてみんなで行った。この人達は早く死んだ。80 年代だったか原子湖の近くのトラクターを解体し、セミパラチンスクに持って行き、売ったことがある。その当時、それら機材が放射能を含んでいることは知らなかった。第２級の障害者である。今、目が見えない。耳が遠い。父、祖父共に癌で死亡した。9 年生の時初めて、目を開けられないくらいの爆発の光、キノコ雲を見た。朝方、爆発を見たこともある。ズナメンカ村に約 2 ヶ月移住させられたことがある。目の薬がほしい、補聴器がほしい。

サルジャル 5、女性、1939 年生

サルジャルで生まれ、サルジャルで育つ。高血圧で心臓も悪い。高血圧の薬がほしい。子供は 6 人、その内、娘が 5 人である。2 人は高血圧である。息子はセミパラチンスクに住んでいる。1952･3 年頃爆発を体験、キノコ雲を見た。2、3 分間続いたかと思われる強い光を体験した。爆発の時には軍人がやってきて、家から離れろと指示された。ドーンという轟音を聞いた。地面が揺れた。その時は、服を頭にかぶせた。1953 年ズナメンカ村に移住させられた。家畜も移動した。多数の軍人がやってきて、車に 2、3 家族ずつ乗せて移動した。移住はその一度だけであった。新学期の 9 月までには帰ってきた。年金は 5000 テンゲもらっている。

2003 年 8 月 12 日　カラウル村（カラウル村病院）

カラウル 1、女性、1924

カイナル村で生まれ、1947 年までそこで暮らした。その後、カラウル村に転居した。被災証明は、1993 年頃取得した。1953 年以降、核実験を体験した。キノコ雲、炎は見ていないが、何度も真っ黒なほこりを体験した。霧のような雨も見た。気を付けろ、扉を閉めろといわれた。1956 年頃、地区からの指示があり、外に出て地面に伏せろ、家の中で火を焚いてはいけない、という指示があった。1949 年当時は実験に際して何も知らせがなかったが、それ以降は実験があるという知らせがあったこともある。地下実験は揺れでわかる。1957 年夏なのに雪が降った。羊がたくさん死んだ。バカナス、アヤグス、タルディ、セミパラチンスクなどへ 15 日間くらい、移住した経験がある。軍

人に連れて行かれた。

カラウル 2、男性、1937 年生

カラウル村生まれのカラウル育ち。10 年生を終え、セミパラチンスクの大学に進学した。その後は獣医師をしていた。1953 年、9 年生の時、軍が 300 台の車で私達を移住させた。行き先は軍が割り当てた。私は、セルゴプル[5]、セミパラチンスクに移住した。当時、移住に際して、500 ルーブルの手当があった。軍が村の指導者達へ移住の指示をした。実験により影響があるかもしれないので、安全のために移住するという説明が一度だけあった。帰ってきたら、鶏の毛がみな抜けていた。30 歳代の若者が 30 名、村に残された。愛国心を煽り、残るように仕向けた。男性がほとんどだったが、女性も数人いた。今は誰も生きていない。4、5 年後に死に始めたのだ。他の場合には、拡声器で家の中にいないように、暖炉の煙突の蓋を閉めるよう指示のあることもあった。1974 - 98 年に主任獣医師を務めた。主にアクブラク、カイナル、ウズンブラク[6]で放牧した。1986 年、800 頭の馬の内 300 頭が死んだ。2000 頭の羊が皮膚病になった。それらの動物は旧ソ連がすべて持ち帰った。騒がないように指示された。1970 - 80 年にクルズトゥ[7]にズモーグフと呼ばれる羊を飼う場所があり、1200 から 1300 頭の羊の目が一日で見えなくなっていた。これはポリゴンの影響だと思う。キノコ雲、真っ赤な空、地震を体験した。爆風で窓ガラスが割れたこともあった。15 回くらいは見た。1978 年に一度だけ雲が流れてきてホコリが降ったことがあった。1972 年心臓発作を起こした。息苦しい。年に 3、4 回病院に行く。9700 テンゲもらっている。障害者になれば、年金額が上がる。障害者年金がほしい。薬がほしい。

カラウル 3、女性、1936 年生

ヌクタルアウェゾフ村[8]生まれ。7 年生までそこで育ち、それ以降はカラウルで生活している。1953 年 8 月夏休みに軍人が来て移住させられた。その途中、キノコ雲を見た。移住先は、カスカブラ村の近くであった。空が真っ赤になった。移住の理由は示されなかったが、怖がったりはしなかった。移住先からは、3・4 日で帰ってきた。アヤグス近くへ移住した人は 15 日後に帰ってきた。ヌクタルアウェゾフ村の人はカスカブ

[5] 回答者によれば、アヤグス近郊の軍事都市らしい。
[6] カイナル村周辺の小村だと思われる。
[7] 回答者によれば、カラウルから 90 キロほど離れた集落。
[8] 回答者によれば、カラウル近郊の小村。

ラ村へ行き、全員 3 日後に帰ってきた。帰村後、検診などなかった。ヌクタルアウェゾフ村で家畜が死んだ。不健康になった。崩れた家があった。急に湧いた泉もあった。ポリゴンのせいで病気になった。昔は健康だったのに現在は病気だ。医療費が高い。18000 テンゲは必要だ。薬がほしい。

カラウル 4、女性、1929 年生

サルジャル村で生まれ、1947 年の結婚を機に、カラウル村へ転居した。1953 年にアヤグスに移住した。煙が上がったのを見た。村の地区の組織団が車を手配して、移住させた。500 ルーブルもらった人もあるようだが、私はもらっていない。移住しなければならないというのを人づてに聞いた。15 日ぐらいで帰ってきた。地面が揺れた。外に出るよう指示された。移住先から帰ってくる途中に光を見た。家畜の毛が抜け、死んだ。強い風、煙の臭いがあった。煙の臭いは頻繁に経験した。眼圧異常があり、1 年前に手術した。生活費は、7300 テンゲ程である。夫は 16 年前に死んだ。医療援助を希望する。

2003 年 8 月 13 日、ドロン村[9]（ドロン村診療所）

ドロン 1、女性、1937 年生

ドロン村で生まれ、その後 1955‐69 年の間、ボケネ村[10]に住む。ボケネ村にいるとき、実験の際には、綿のようなものを見た。それが真っ赤になった。窓を閉めるように、また、火を焚いてはいけないと言われた。ボケネ村、ドロン村で、将校・軍人が村の各家を回り外に出ろ、（自然に出来た）窪みのような穴に伏せろ、窓を閉めろ、煙突を空けたままにするな、との指示を受けた。軍人が村にやってきたのは実験の前日、「明日実験がある」と言われた。いつも警告があるわけではなかった。予告無しのこともしばしばであった。実際、これ以後に軍人が来たことはない。その後の検査などなかった。有害なものであるとは知らなかった。移住経験は無い。ポリゴン年金[11]を含め総額 7000 テンゲである。夫は 9000 テンゲもらっている。1955 年に結婚し、5 人の子供をもうけたが、その内 1 人は死亡した。嫁も癌で死亡した。ポリゴンのせいで死んだという証明

---

[9] インタビューに同席した診療所医師の話だと、ドロン村人口は公の発表では、790 名あまりであるが、実際にはその半分も居住していないとのことだった。

[10] 回答者によれば、ドロン村対岸 10 キロの位置にある小村。位置的には、地図 1 のボデネ村の可能性もある。

[11] 証明書を持つものは、年金支給開始時に増額を受ける。住民は一般に「ポリゴン（の）年金」と呼んでいる。詳細は不明だが、全ての被災者に一律同額で支給されているわけではないようである。

書をもらった。娘がこの村に 1 人住んでいて、店を経営している。1 人はセミパラチンスク、他の一人はクルチャトフに住んでいる。菜園ではジャガイモを作っている。孫は 3 人にいる。車を所持している。1 人は短大生、他は 10 年生と 2 年生である。胃炎、腎臓炎、低血圧などがある。子供に援助してほしい。リンパ腺が悪く、手術が必要である。草を煎じたり、時々胃薬を飲ませる。これが初めてのインタビューである。

ドロン 2、男性、1921 年生

マーラヤ・ウラジミロフカ村[12]生まれ、1932 年ドロンに移住してきた。最も古い住人の 1 人である。1949 年秋の 8 月 29 日頃だと思うが、ラジオで「外に出ろ」「火を焚くな」「爆発を見るな」と放送があった。軍人が飛行機で来た。何の爆発かは知らなかった。ただ「実験がある」と言われた。赤い雲を見た。写真を撮ったが、カメラを没収された。朝にコルホーズ指導部から知らせが来た。昼には爆発があった。「外に出ろ」と言われ子供を連れて広場に集まった。伏せてはいない。軍人の数は 1 人か 2 人で、村々に通達して回っていた。1949 年以後、軍の通達は無かった。通達は 1 回きりだった。1949 年の実験では、地面が揺れ、書棚も揺れた。実験が有害だと知ったのは随分後になってだが、いつ頃からか村人の健康が害され始め、その有害性を漠然と理解した。妻子とも病気だ。ポリゴンの影響だと思う。実験の前、村中の犬が吠えていた。父母の時代は 80 歳まで生きる人もいたが、今は誰もそこまで生きられない。脱毛もあった。いつかは不明だが、黄色い雨を見た。黒い雲が流れてきた。イリティッシュ川の水を飲むな、という村の噂を聞いたことがある。49 年の最初の実験から 2、3 回目の実験後にあった噂だ。移住経験は無い。それを指示されたこともない。ドロン村はもともと大きな村ではなかったが、1960 年代はコルホーズで、その後ソホーズになって大きくなった。コサックの村だった。穀倉地帯で、イリティッシュ川まで 50 メートルしか離れていない。1949 年当時は、電話局の中継局の技術者として通信の仕事をしていた。年金は 9813 テンゲ、その内 1600 テンゲはポリゴン年金だ。息子 2 人は軍関係、モスクワとパブロダール[13]近くにいる。特に障害は無い。孫は 5 人いる。今は、妻と 2 人暮らし。セミパラチンスクに入院した。髪が抜ける、歯が抜ける。

---

[12] 回答者によれば、ドロン村から 30 キロに位置する小村。但し、地名は、ロシア語名称からカザフ語名称へと変わっている可能性もある。例えば、ボリシャーヤ・ウラジミロフカ村は、カザフ語であるブラス村へと変更された。

[13] パブロダール州は、セミパラチンスク市のある東カザフスタン州西隣に位置し、核実験場にも隣接する。ここでは、その州都パブロダール市のことを指すと考えられる。

ドロン 3、男性、1936 年生

ウクライナ生まれ。1954 年からドロン村に住んでいる。処女地開拓のため、コムソモールの一員としてカザフに入植した。1956 年に娘が生まれた。1956 年の 5 月ラジオで家の外に出ろと指示された。高台に避難した。初めて爆発を見た。キノコ雲を見た。赤い火、黒い玉を見たが、近くで見た感覚であった。轟音を聞き、雲があがった。しばらくたって家に入っていいという許可が出た。家の中に入ると暖炉の灰が散らばっていた。ラジオ通達を聞いたのは、この 1 回だけだった。何のための爆発かは説明がなかった。「実験」とは言われなかった。「爆発」と言われた。1957 年頃、2 キロ先に何か鉄のかたまりが落ちた。爆風でガラスが飛び散り怖かった。キノコ雲を見たのは 1 回だけであった。爆発は何回か見た。何の音かと聞いた時も何も言われなかった。軍人がたくさん来たこともあった。土を持っていった。「育っているんだね」という軍人の何気ない一言を聞いた。移住経験は無い。年金 5600 テンゲでポリゴン年金 1600 テンゲをもらっている。

ドロン 4、男性、1925 年生

ザイサン[14]生まれ、1960 年ドロン村に移住した。親戚がドロンにいたからだ。1962 年、閃光や煙を見た。その後、特に 60 年代、何度も見た。1965 年、66 年と続けて見た。デゲレン山で狩りをしている時に、火と煙、そして立っていられないほどの衝撃波を経験した。2 人ほど倒れたことがある。実験の通達はなかった。軍人が来たこともない。デゲレン山は立入禁止区域だったが、狩りのためによく行っていた。但し、1975 年以降は、禁止区域が解けた。狩りのためだけではなく、レンガ、廃材、水道管などの色々な機材を持ってきて商売をした。危険は知らなかった。デゲレン山での狩りで取った動物に異常は見つからなかった。狩りには毎週のように行った。年金はポリゴン年金も含めて 5600 テンゲである。機械工として働いた。

ドロン 5、女性、1929 年生

ドロン 2 の配偶者。パブロダールで生まれ、1933 年からドロン村に住んでいる。1949 年に軍人が来て通達した。「爆発があるので高台の広場に行け」「地面に伏せろ、爆発を見るな」などと言われた。しかし誰もその通りにしなかった。1949 年以降、地上実験の様子は全て見た。その都度軍人が通達に来た。移住経験は無い。電話局技師として働

[14] 回答者から東カザフスタン州であることは聞いたが、地図上では確認できなかった。

いた。被災証明書は 95 年に発行された。

2004 年 4 月 29 日　カザフ放射線医学環境研究所

2004 年 4 月のインタビューアー：川野

研究所 1、女性、1952 年生

クリビンカ村で生まれた。会計係をしていた。1971‐80 年間はコヤンバイ、81‐86 年間はチェリョムシュキー、86‐87 年間はブラス、そして今はパブロダールにいる。1957 年頃、2 回ぐらい爆音、地面の揺れを体験した。外に出るよう指示された。心臓が悪く、高血圧で、目と左腕が疲れる。クリビンカ村は癌での死亡が多い。父も食道癌である。母は健在。5 人の娘がいる。1972 年生まれの長女がいる。末子は 11 年生。爆発がはっきりと核実験だと知ったのは年金をもらうようになってからである。1998 年から年金受給が開始した。年金受給開始は男性 50 歳、女性 45 歳だった。53 年から 63 年の間にポリゴン地域にいた住人の年金受給開始は、現在、男性 62 歳、女性 58 歳である。ポリゴン年金は 1997 年までに年金をもらうようになった人は 1300 テンゲである。一般の年金は 5000 テンゲである。

研究所 2、男性、1964 年生

研究所 1 の配偶者。獣医師として働いている。移住経験は無い。爆発を体験したとき、クルチャトフから 50 キロのところに住んでいたが、穴の中に伏せろと言われた。キノコ雲は非常に大きかった。核実験は現在の健康に影響を与えたと思う。寿命が短くなったと思うし、病気にもなった。生活そのものには影響はないと思う。72 年に先天的な心臓病で入院した。年金がもう少し上がればいいと思う。86・87 年、テレビで核爆発があったと言っていた。ポリゴンのことは知っていた。ポリゴンと健康との因果関係については、誰も発言していない。[15]

研究所 3、男性、1940 年生

1959 年までサスノフカ村で生活し、59 年から 3 年間は入隊のためアルマトイ[16]に行った。62 年 12 月よりブラス村に住んでいる。実験の時通知はなかったが、揺れたのを

---

[15] 共同研究者で本調査に同行しているタルガット先生によれば、研究所 1 と 2 の夫婦は、本インタビューの内容を記録し、残すことを嫌がったそうである。

[16] あるいは「アルマティ」。1991 年のカザフスタン独立までは、アルマ・アタと呼ばれた。人口 100 万人を超えるカザフスタン共和国最大の都市。

覚えている。雲が見えた。犬がほえた。黒っぽいものを見た。外に出るよう指示があった。村の行政局から指示があったからだ。何らかの実験があったと思っていた。犬を宇宙に飛ばしていると思っていた。独立前に核実験だと知った。移住体験は無い。通達があっただけだ。叔父 2 人が癌で死んだ。1 人は、機械工、もう一人は林業をやっていて、66 歳くらいで癌で死亡した。1962 年のブラス移住後は、癌の話とかを聞くようになった。ポリゴンは軍事施設だと思っていた。皮膚の一部を切り取ってアルマトイに送られた。それはポリゴンのせいだといわれた。80 年頃の話である。放射線治療をしたことがある。血圧、甲状腺、胃炎、尿結石が心配だ。尿から 4 ミリくらいの石が出た。いろいろな検査をした。体調が悪い。甲状腺のせいだといわれた。前立腺が悪い。

研究所 4、男性、1934 年生

グラチ村出身である。実験の時、軍人が来て、避難するように、伏せるように言われた。50 年代の秋、大きな爆発があり、家が倒れた。太陽のような光、煙、雲を見た。ポリゴンがあるのは知っていた。しかし、核爆発とは知らなかった。13 日間別の病院に入院したことがある。尿が止まらない。不健康な状態はポリゴンのせいかは分からない。村人は病人が多いのは事実だ。8 人子供がいるが、子供たちは健康だ。

研究所 5、男性、1946 年生

バシュコリ村[17]出身である。1955 年か 56 年くらいに核実験について聞いたことがあるが、見たことはない。大人が爆発、爆発と言っていたけれど、実際、体験したことはない。軍人が来ることもなかった。子供は息子 4 人、娘 4 人の計 8 人である。高血圧症である。昨年 9 月に入院した。胃痛があり、腎臓に石があった。ポリゴンの影響かどうかは分からない。94 年くらいから、左手が上がらない。第三級障害者である。

研究所 6、男性、1953 年生

出生後、ウスチ・カメノゴルスク[18]から 15 キロくらいのところで暮らした。1968 年からクルチャトフにいる。但し、1988‐97 年はパブロダールにいた。仕事で核実験に参加した。電気関係の仕事に携わった。その期間は、1978 年 10 月から 1986 年 12 月までである。ウスチ・カメノゴルスクでも、クルチャトフでも地面が揺れた。

---

[17] 回答者によれば、150 世帯くらいの小集落らしいが、位置は確認できなかった。
[18] 現在はカザフ語名称であるオスケメンあるいはウスケメンと呼ばれる。東カザフスタン州の州都、人口約 30 万人。セミパラチンスク市から東に約 180 キロに位置する。

2004 年 4 月 30 日　ボデネ村（各自宅を訪問）

インタビューアー：川野

ボデネ 1、女性、1942 年生

核実験のことはよく覚えていないが、外に出て毛布を被った。健康状態は良くない。

ボデネ 2、男性、1933 年生

実験の時、外に出て避難するように言われた。見るなと言われたが、子供だから見てしまう。地面がかなり揺れた。多くの実験があった。虹みたいのものをみた。外に出て地面が揺れた。伏せるように言われた。兵隊が来た。実験後誰が病気になったとかそういうことは覚えていない。南に移住しろという指示はあったが、誰も行かなかった。ポリゴンが与えた影響はやはり病気だろうと考えている。多くの人間が、長生き出来なくなった。以前は多くの者が長寿をまっとうできた。ポリゴンのせいである。自殺者が 80 年代くらいから 1 年で 5、6 人あった。カザフ人女性が自殺したという話など聞いたこともなかった。これもポリゴンの影響である。母は食道癌で死亡した。心臓疾患、白内障もあり、全部ポリゴンのせいだと思う。

ボデネ・セミパラチンスク間は白タクで移動する。料金は 600 テンゲ。クルチャトフ・セミパラチンスク間はバスがある。年金をもらったらセミパラチンスクに遊びに行く。たくさんの村出身者がセミパラチンスクに住んでいる。仕事を求めて行くのである。夫の年金は 9800 テンゲ、妻 5800 テンゲである。95 年からポリゴン年金も加えられた。それぞれ 1800 テンゲと 1440 テンゲだったが、今年から若干アップした。年金の一番低い人は 5500 テンゲだ。年金は約 5500 テンゲから 9800 テンゲの間だ。[19]

ボデネ 3、男性、1933 年生

生まれてずっとこの村で生活をしている。但し、54 - 57 年までは、ウラジオストック[20]に軍隊に行った。50 年代、休暇で帰ってきたときに、核実験を見た。軍隊から帰ってきて、核実験だと分かった。56 年に休暇で帰ってきた時にキノコ雲を見た。ピカッと光った。村はずれの穴が掘ってあるところに避難した。父母は、70 歳代まで生きた。食事は肉食ではなく、乾燥チーズ、ヒエ、粟を食べた。ミルクはよく飲んだ。喘息、

[19] インタビュー後、編者らがお茶をご馳走になりながら、聞いた話である。核実験体験に直接関わりのない話も含むが、住民の暮らしを知る意味では重要であると考え、掲載する。

[20] 人口約 60 万のロシア極東部の軍港都市。

慢性気管支炎である。トラクターの運転手をしていた。ほとんどの住人がレンガ仕立ての家に住んだ。自殺者が多い。目が悪い。

ボデネ 4、女性、1939 年生

1945 年から 49 年までモスティク村に住んだが、それ以外はずっとここで生活している。父が戦死し、母が死に、その後叔父さんに育てられた。親戚の家を転々とした。食生活は乳製品が中心であった。58 年に結婚してからずっと病気だ。体のあちらこちらが悪い。甲状腺障害がある。全部ポリゴンのせいだ。実験の時、外に出て、伏せろと言われた。通知があり、外に出て、穴の中に伏せた。実験だとは言われたが、核実験とは言われなかった。49 年から実験を見ている。キノコ雲を見たし、衝撃波も経験した。家の中の食器も割れた。薬の臭いがした。雨が降ると、地面が真っ黄色になった。58 年からは頭痛が始まって体調が悪い。流産もした。夫はポリゴンのせいで亡くなった。肝臓、腎臓が悪い。最後の子供を産んでから流産を数回した。89 年にシャガンで爆発があった。地上実験の時は、知らせがあったが、地下実験の時はなかった[21]。88 年から 89 年クルチャトフの方でキノコ雲を見た。

ボデネ 5、男性、1934 年生

ずっとここに住んでいる。いつも頭痛があり、高血圧でもある。頭部を怪我したことがある。62 年から病気がちだ。特に胃炎がひどい。ポリゴンの影響かと思う。核実験の時、家から出て見てはいけないと言われた。49 年からキノコ雲を見た。窓が壊れたり古い家が壊れた。

ボデネ 6、女性、1942 年生

ボデネ 5 の配偶者。ずっとここに住んでいる。母は 1953 年に胃癌で死亡した。父は脳卒中で死んだ。姉は高血圧で倒れて死亡し、妹は心臓発作で死亡した。当時は乾燥した食物を食した。ヒエ、粟が主食だった。羊の乳を飲んだ。52 年以降は牛の乳を飲んだ。常備薬はない。蓄膿症がひどい。子供の 1 人が 72 年 5 歳で白血病で死亡した。ポリゴンのせいだと思っている。54 年くらいから核実験かなぁと思っていた。49 年に見たことは覚えているがその後のことはあまりに頻繁で回数等は覚えていない。実験後に病気になったかどうかという点は覚えていない。

[21] インタビューに同席したボデネ村の医師も同じ指摘をした。

ボデネ 7、男性、1935 年生

ずっとここで生活している。1952 年に父、54 年に母が胃の病気で死んだ。ヒエ、粟、麦を食べ、ヨーグルトを主食とした。牛乳は飲んだ。今年、カザフ放射線医学環境研究所に入院した。体のあちこちが病気だ。89 年、ブラス村の病院に 12 ヶ月入院した。今は完治したが、胃炎にもなった。1949 年に第 1 回目の爆発を見た。その時、軍人が来て外に出て伏せるように言われた。まぶしい光、その後大きなキノコ雲を見た。飛行機が飛んでくるのを見た。49 年から 59 年の間に大きな爆発を経験した。全ての病気は核実験のせいだと考えている。虚弱体質を感じる。59 年頃の爆発が最も怖かった。ものすごい衝撃波でガラスが吹っ飛んだ。

2004 年 7 月 29 日　ボデネ村（各自宅を訪問）

2004 年 7 月のインタビューアー：平岡・松尾・川野[22]

ボデネ 1、男性、1935 年生

心臓、肝臓、血圧等の病気があり、腎臓を摘出した。このような病気は核実験の影響だと思う。ボデネ村では、今では 80 歳以上は 1 人しかいない。90 年以降、核実験の害がわかった。90 年まではあまり気にしていなかった。88 年には村で 7 人が自殺した。70 歳にならないで死ぬ人が多い。肉、バターなどの集荷の責任者を仕事とした。特にノルマを考えたことはなかった。爆発時、飛行機・ヘリで飛んできて、ビラを一括投下し、それを警察官が配った。爆発の時は、この様な通知の仕方であった。爆発は地震のように揺れたし、窓ガラスが割れることもあった。熱線、爆風、雨の記憶は無い。この地区に援助はあるのか、見たことがない。議員に、現在 1500 テンゲのポリゴン年金の値上げを訴えた。ソ連時代は医療が無料であった。

ボデネ 2、男性、1933 年生

健康はまずまずだ。あまり病気はしない。薬も飲んでいない。核実験の影響についてはわからない。実験の時、音も聞いたし、キノコ雲も見た。当時、小学校教師を、後にはカザフ語・カザフ文化の中学教師をしていたが、核実験時は授業中に「爆発」の予告があった。全員、教室の外に出て伏せたものだ。将来への懸念として、特に子供たちへの影響が心配だ。

---

[22] 当日は、家族病歴、家屋、食事などの基本事項は記録していない。

ボデネ 3、女性、1945 年生

1947 年生まれの弟が 10 年前に自殺し、その前にはいとこが自殺した。自分の仕事は羊飼いで、500 - 1500 頭の羊を飼っていた。1972 年、肺炎で入院した。ポリゴンの影響だと思う。ポリゴンの影響は 88 年くらいに知った。スレイメノフ[23]がきて、医療はすべて無料になると言った。5、6 歳の時の記憶だが、爆発の時、「家から出ろ」と言われた。家の中にいて、爆風でドアが開いたこともあった。火の玉も見たし、爆風も感じた。医療、薬の援助が必要だ。子供や孫、若い人が泣かないようにしてほしい。

ボデネ 4、男性、1949 年生

鍛冶を仕事とした。仕事中の爆発で大怪我をしたことがある。同級生が癌で多く死んだ。84 年ごろまでポリゴンの害のことは何も知らなかった。85 年に娘が白血病で死んだ。核実験にせいだと思った。2 番目の娘は腎臓の異常があり、遺伝的影響だと思う。ここでは死産、流産も多い。実験の時、家の外に出て、穴の中に入ったり、窪地で伏せたりした。キノコ雲を見た。地震のように感じたものだ。雨が降った。地面が黄色くなったが、いつ頃かは不明だ。子供、孫のことが心配だ。医療の無料化、薬・機器の援助を望んでいる。テレビやラジオでは無料化になるというがなっていない。病院では「お金はありますか」と尋ねられる。71 - 76 年の 5 年間で、羊飼い 10 人くらいが癌で死んだ。自分たちを実験動物扱いしたのだ。

ボデネ 5、男性、1937 年生

検診には 200 テンゲ必要だ[24]。レンガ工場で働いた。64 年頃から体調が悪い。煎じ薬を飲んで自分で治療した。99 年おたふく風邪で手術した。これは核実験のせいだと思う。核実験はいつも見ていたが、いつ頃かは定かではない。鉄骨が曲がったこともあった。窓ガラスが割れたこともあった。60 - 70 年頃、雨が降って地面が黄色くなった。トマト、きゅうりができなくなった。キノコ雲を見た。地震のように感じた。実験の時、最初の 2、3 回は予告があったが、後には何も知らされなかった。こんな実験が今後無

---

23 セミパラチンスク核実験場閉鎖の原動力となったネバダ・セミパラチンスク運動の指導者。

24 ボデネ村には医師が常駐していない。検診の際には、医師が村に滞在するが、その費用は検診を受ける住民が負担する。検診自体は無料だが、200 テンゲは医師滞在のための費用に充てられるものと思われる。なお、このことは翌日のモスティク村でのインタビューで判明した。

いことを祈る。

2004 年 7 月 30 日　モスティク村（各自宅を訪問）

インタビューには、モスティク村診療所の医師も同席した。同医師によると、モスティク村診療所に常駐しながら、ボデネ、ドロン、チェリョムシュキーの各村も担当しているとのことであった。また、モスティク村は、1950 年代は 1000 人から 1500 人くらいの人口を有し、200 世帯ほどが生活していた。現在の人口は約 450 人、約半数が白人（ロシア人、ウクライナ人、ボルガ川流域の民族であるモルドビア人など)、残りの半数がカザフ人である。ドイツ系 6 家族も居住している。＜以上、同医師談＞

モスティク 1、女性、1928 年生

1949 年からチェリョムシュキー村に、52 年からはドロン村に、そして、60 年からはずっとモスティク村に住んでいる。家事は少しやる。近くに住む娘が家事を手伝ってくれる。56 年頃には、爆発が核実験だとわかっていた。このことを人に言ってはいけないと言われたことはない。53 年頃初めて実験を見た。家に戻って座っていろと言われた。実際にはすぐには座らなかった。爆風は感じた。熱風については記憶にない。雨も降った。実験後に雨に濡れたことがある。核実験の人体への影響の有無については不明だが、核実験の影響はあるかもしれない。腎臓が悪い。8 年前には肉瘤の手術を受けた。7 年前には胃炎を患った。援助が何もない。治療が有料で大変だ。薬もないし、その上高い。医者に行くと薬を買ってこいと言われた。手術に必要な薬は自分で買わなければならないからだ。検査は無料で、毎年、400 人ぐらいが検査を受けている。皆さんの研究を子供、孫に役立ててほしい。核実験があったためにお金が入ると言われたが、実際はそうではない。核実験は当時良いことだと思っていた。政府に特に不平不満はないが、年金は増やしてほしい。ポリゴン年金はたったの 1783 テンゲだ。

モスティク 2、男性、1944 年生

1947 年からモスティクに住んでいる。父はイリティシュ川航路の集荷業者であった。自分はトラクター運転手であった。56・57 年頃よく実験を見た。当時は実験の前に知らせがあった。皆集まって外に連れ出されたが、その後予告はなくなった。飛行機が 2 機来て、その後きれいなオレンジ色の光があった。音がして、キノコ雲も見た。64 年に軍隊に徴兵された。その時、核実験を見たと言ったら誰も信じてくれなかった。上官

には怒られた。あまり喋るなと言われた。60 年代には噂で核実験だと知った。不健康は核実験の影響だと思うが、自分は健康良好だ。入院したことはない。75 年頃から悪夢を見る。両親とも胃癌で死亡した。セミパラチンスクで診断を受けた。子供達に治療を与えてほしい。役所に不満がある。誰かが手術するときにはカンパする。この村に医療支援があるかどうかは知らない

モスティク 3、女性、1948 年生

モスティク 1 の娘。家族はベラルーシからアルタイ地方[25]に移り、1933 年にカザフに来た。大学を卒業した。63・64 年ぐらいから核実験だと噂で知っていた。喋るなと言われたことはない。核実験の人体への影響はあると思う。この地域は軍の駐屯地だったので、爆発・実験は当然と思っていた。実験の時は、地震のような揺れを感じた。爆風の記憶は定かでない。60 年頃雨にも濡れたことがある。健康は悪くない。2003 年の検査で高血圧症が指摘された。核実験のせいだと思う

モスティク 4、男性、1936 年生

農林専門学校を卒業した。1961 年、モスクワ近郊から移り住んだ。64 年までチェリョムシュキー、64 年からモスティクにいる。父は、胃癌で 69 年に死亡した。父母はコルホーズ労働者、兄 1 人は胃癌で死亡した。娘は今、クルチャトフに住んでいる。孫は 2 人いる。健康は良くない。重いものを持てない。牛乳、ヨーグルトをよく飲む。心臓病で以前手術を受けたことがある。前立腺肥大、腎臓疾患等もある。実験の影響かどうかはわからない。62 年に核実験を見た。爆風の記憶は確かでない。雨に濡れたことはある。61 - 71 年間、咽頭が痛かった。60 年代から核実験の存在を知っていた。地面の揺れは頻繁だったが、原因はわかっていた。すでに秘密ではなかったのだ。ここから引っ越すとすぐに亡くなる人がいる。この汚れた悪環境に慣れてしまったからだろうか。子供、孫の健康が心配だ。核実験がない方がよいに決まっている。核兵器がない方がよいに決まっている。[26]

モスティク 5、女性、1939 年生

モスティク 4 の配偶者。チェリョムシュキー生まれ、61 年にモスティクに移住した。

---

[25] シベリア南部に位置し、オビ川流域に広がる。南部でカザフスタンと国境を接する。
[26] 同席した婦人はこの意見には賛同しなかった。

63 年に結婚した。小学校教師をしていた。出産後は 2 ヶ月で職場復帰した。55・56 年頃には、核実験のことを知っていた。放射能の話も知っていた。61 年以降、小学校の教師をしていて、生徒に話したことがあるが、これを禁止された記憶はない。ただ、57 年に大きな爆発があって父母に伝えようとしたが、電報局の人に止められたことはあった。実験の時、暗くなり、キノコ雲、埃を経験し、雨に濡れたこともあった。核実験の影響は無いと思う。ポリゴン年金は 1800 テンゲ、教員として 40 年奉職し、一般の年金は 7330 テンゲである。

2004 年 7 月 31 日　カザフ放射線医学環境研究所

研究所 1、女性、1947 年生

サスノフカ村出身。サスノフカ村は、現在は人口が随分減少したが、92・93 年頃は、約 2000 人の住民がいた。現在はカザフ人が多いが、独立以前はロシア人が多かった。サスノフカでは、会計士として働いた。90 年頃核実験のことを知った。57 年頃爆発を 3、4 回見た。揺れもあった。爆発があるとき、校長が来て外に出るよう、建物から避難するよう、指示した。全員が爆発を見に行った。軍人を見た記憶はない。20 年ぐらい前に緑色の雨が降った。その後、野菜が育たなかった。悪夢も見るし、何もしたくないこともある。49 - 57 年の間、爆発が多くあった。大きなキノコ雲を見た。何かは全くわからなかった。病気は、核実験の影響だと考えている。娘が皮膚病である。どの家も病人を抱えている。当時も今も、マカロニ、ジャガイモをよく食べる。

研究所 2、女性、1956 年生

羊飼いをしていた。セミヤルカ村生まれで、高校卒業までそこにいた。セミヤルカ村は、カザフスタン独立前まで 2000 人から 4000 人規模で、ベスカラガイ地区の中心的町だった。しかし、現在は大幅に人口が減少している。73 年にムカタイ村へ移住した。ソ連時代は 600 頭の羊を飼っていた。今は牛を 30 頭、馬を 10 頭、羊を 15 頭飼っている。また、207 頭の人の羊を預かって飼っている。預かり料は、羊一頭につき月 250 テンゲである。月収は 6 人家族で、67500 テンゲである。核実験の影響はあると思う。地震のように揺れた。実験の時は外に出るよう指示された。ラジオでの指示の時もあれば、村長が直接伝えに来たこともあった。軍人が来たこともあった。また、何も知らせがないこともあった。後には指示がない方が多かった。窓ガラスが割れたこともあった。校舎が壊れたこともあった。爆風についてはわからない。疎開したことはない。誰かが

迫ってくるような悪夢をよく見る。キノコ雲の大きさは空の半分ぐらいの大きさであった。古い家が壊れた。家畜が走り出してパニックになった。セミヤルカ村で、85 年頃、家族 6 人全員が白血病で亡くなったということもあった。74 年頃、セミパラチンスク 21 がクルチャトフという名前だと何となく知った[27]。

研究所 3、女性、1935 年生

ブラス村生まれ、現在はセミョーノフカ村に住んでいる。セミョーノフカ村は、50・60 年代は人口 5000 人程の比較的大きな村であった。しかし、独立後はドイツ人が帰還のため人口が大幅に減少した。現在、2000 人程が居住している。ブラス、セミパラチンスク、モスティクと転居し、47 年にセミョーノフカに来た。そこで中学校を卒業した。年金を家族で分けあっている。47 歳の時に、夫と死別した。夫の死因は肺癌であった。孫が 8 人いる。年金が足りない。ポリゴン年金が 1500 テンゲ、一般の年金が 5600 テンゲである。29 年間ソロホーズ、病院など様々な職種を経験した。一般の年金は 90 年から、ポリゴン年金は 2001 年から受給開始された。退職前の給与は 80 ルーブルだった。核実験の影響は大だと考える。この地域の人の病気は、両親の世代はわからないが、自分の世代と子供世代では影響が大きいと思う。63 年に噂で爆発が核実験だと知った。59 年に初めて爆発を見た。キノコ雲と埃は体験したが、雨についてはわからない。誰かの指示で白い布をかぶって外に出ろと言われたことが数回あった。軍人もいた。放射線の影響について知った時期は覚えていない。子供達は体が弱い。どうもやる気がない。[28]

---

[27] 名称は、ソ連核開発の父とされるイゴル・クルチャトフに因む。1974 年、「クルチャトフ」に改名されるまでは、「モスクワ 400」、「セミパラチンスク 21」、「カネチナヤ（Konechnaya）」の順でその名称が変わった。

[28] 途中から感極まり、涙を流しながらの回答であった。